交流

平家落人と源為朝伝説の島―奄美大島歴史深訪（1）

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科
佐々木　秀美

はじめに

私の故郷“奄美大島”は2021年，世界自然遺産に登録された。それは，マングローブや亜熱帯の豊かな森や美しいサンゴ礁などがある風光明媚な島であることと，アマミノクロウサギに代表される希少種を含む多様な生物が生息・生育していることが評価されたことによる。天然記念物とされるアマミノクロウサギは私も一度しか見たことがない。野生動物特有の俊敏さで一瞬のうちにどこかに隠れてしまう。

さて，奄美に帰郷の際，実家のある奄美市名瀬への移動には奄美空港でレンタカーを借りて移動するが，その際，旅の安全祈願のために必ずお参りするのは，笠利町大字節田にある“奄美姑神社（阿麻弥姑《アマミコ》神社）”である。奄美姑神社の由来は，古事記の序章，国造りの様に，女神の阿摩弥姑（アマミコ）と男神の志仁礼久（シニレク）が天から降りて来て，奄美大島を創ったという伝説のある神社である。更にその道中，必ず目にしていて何年来気になっていたのが“今井権現”という看板である。その看板に引き寄せられるようにこの度，その地を訪問した。きつい山道の石段の先にあったのは今井権現神社であった。次に，奄美の瀬戸内にはサンゴ礁が観察できる水中観光船がある。その水中観光船で奄美のサンゴ礁を堪能したあと，加計呂麻島にフェリーで渡り，そこでたまたま目にしたのは，平家ゆかりの大屯神社（おおちょんじんじゃ），と源氏ゆかりの実久三次郎神社であった。壇の浦の闘いまで永い間犬猿の中であった源氏と平家の君たちが左右に分かれて暮らしていたのか？不思議であった。

ここでも闘いはあったのか？因縁のある両家だけに興味深かったが，住んでいた年代が違うようである。現地の方々に聞いてみると両神社共に祭りがあり，その時に両者が区別できるようなＴシャツを着て競い合う事もあったようだ。

現在，NHK の大河ドラマ『鎌倉殿の13人』が進行中である。そのドラマを拝見して思う事は，源氏と平家の闘いの後の歴史の中に奄美大島が少々，関わっていたことである。私が奄美について無知であったことに加え，悠久の平安の時代，遠い地の出来事にように思われたことが真に身近に感じ始めた。そこで，これらの神社を手掛かりに奄美大島に関して非常に興味・関心をもちはじめたので調査をし，記しておこうと考えた。調査には，奄美大島 HP や本件に関する著作及び WEB で掲載されていたことも含めている。

奄美大島は，奄美群島の一つであり，鹿児島県に属し，九州本土の南に点在するトカラ列島と沖縄諸島の間に連なる奄美大島，加計呂麻（カケロマ）島，請島，与路島，喜界島，徳之島，沖永良部島，与論島の８つの有人島からなる島々で形成される。中でも奄美大島は，九州南方海上，鹿児島市と沖縄本島のほぼ中間に位置する。屋久島と奄美大島の間には，七島灘と呼ばれる波の荒い東シナ海の海域がある。七島灘の海域に有人・無人の島が十あったことから十島村と呼ばれていた。子供のころにこの十島

連絡先：佐々木　秀美
〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3
E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

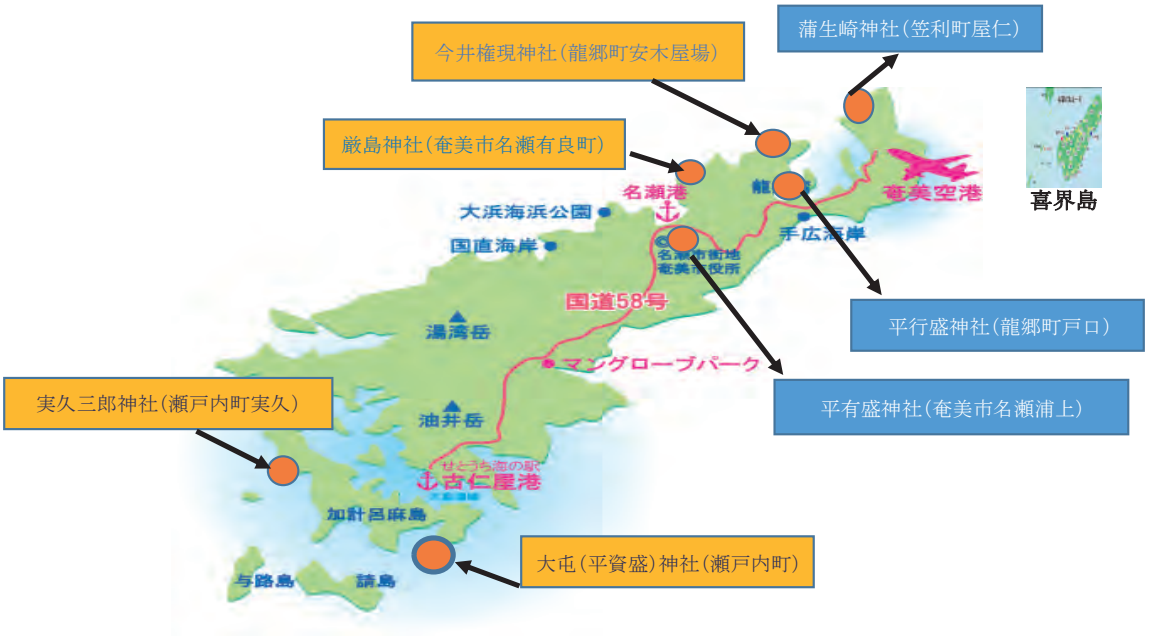

図１　奄美大島 HP 画像から筆者作成

村には安徳天皇(1178-1185)の子孫だと名乗る老人が住んでいると聞かされたことがあった。筆者も,源・平の時代は800年以上も昔の話である位の事は知っていたから，“そのおじいさんは気が狂っているに違いない”とそれっきり忘れていた。が，奄美大島に点在する平家の落人伝説から考えると，案外，一つの伝説として成立する事柄だったかもしれないと考え始めている自分にも驚く。また，『奄美大島物語』[1]にも安徳天皇の生存説についてはいくつかの地域で論じられているようであった。その中に奄美大島に関わる島々の中での生存説については記載されていない。奄美大島は，天気予報では日本列島の上に枠でくくったところで，紹介される離島であり，沖縄に次いで多い台風の通り道である。気候は温暖，時折，スコールのような激しい雨が２時間ほど降るときもあり，亜熱帯の気候で雪は降らない。

『大奄美史』[2] によれば奄美大島は，琉球文化と本土文化の影響を受け，固有の文化を造りあげ，また，その位置的関係から，侵略を免れることができ，その特有の文化を守ってきたとされる。自然環境に恵まれた奄美の歴史にもその地を揺るがすようなことはあったらしい。鎌倉幕府（1185-1333）の後に成立した室町幕府（1336-1573）は琉球からの侵略を防衛するために奄美大島に行政府を置いたとされるが，この地がどこかも今回は未調査である。

しかし，ここで今回紹介したいのは，奄美大島の地図上（図１），龍郷町安木屋場にある今井権現神社，瀬戸内町加計呂麻島諸鈍（ショドン）に平家の落人平資盛（タイラノスケモリ）を祀った大屯神社（おおちょんじんじゃ），その反対側にある源為朝（1139-1170）の子源実久三郎を祀った実久三次郎神社についてである。調査してみるとこれらの神社には源・平の闘いの只中にあった人物たちを祀った神社であることが分った。上図（図１）オレンジ色の枠内の神社は参拝済みであるが，水色は未参拝であり，この後，参拝する予定である。

１．壇の浦の闘い

実際，現地訪問したり，調査したりすると，奄美大島に存在する神社に祀られている者達は，それぞれ，壇の浦で闘った平家の武将達であり，平清盛（1118-1181）の孫たちであった。壇ノ浦の戦い（1185）は，平安時代の末期に壇ノ浦（現在の山口県下関市）で行われた戦闘である。この闘いは事実上，平家と源氏の闘いであるが，実はその発端に天皇家の皇位継承に関わる問題があった。つまり，天皇家と身内内

も含めた源・平の闘いは早くから始まっており，古く，根深い問題であったようだ。

下記　桓武平氏系図（図２）でも示したように，第50代天皇，桓武天皇（737-806）の系統である平清盛は娘，徳子（1155-1213別名建礼門院）を第80代天皇高倉天皇（1161-1181）に嫁がせ，その間にできた幼い子供を天皇の後継者として立てた。これが安徳天皇である。高倉天皇の没年と安徳天皇の生誕年から考えても２年の相違しかない。この幼い天皇の即位には平家の命運がかかっていたようだ。幼い天皇の背後にあって清盛は権勢を誇り，栄華を誇った。この権力統制は周囲の不平・不満が募ったようである。そうした混乱の最中に源氏の源頼朝（1147-1199）が京都に攻め入り，京都から飛散した平家を源義経（1159-1189）が壇の浦まで追い詰めた。壇の浦の闘いで義経の軍勢に負け，滅亡に至ったとされる。壇の浦では最初，平家が優勢であったが，やがて潮の流れが反転し，義経軍は乗じて猛攻撃を仕掛けた。平氏の船隊は壊乱状態になり，やがて勝敗は決した。清盛の正室であり，徳子の母である二位尼（平時子　1126-1185）は死を決意して，幼い安徳天皇を抱き寄せ，ともに海に身を投じたという。続いて安徳天皇の母である建礼門院ら平氏一門の女たちも次々と海に身を投げた。その他の武将たちも覚悟を定め入水した。徳子の異母兄の平重盛（1138-1179），平基盛（1139-1162）は既に他界していたが。この時，重盛の次男平資盛（1161-1185）と四男平有盛（1164-1185），そして，基盛の長男行盛（不詳-1185）も入水したとされる。海中から浮上してきた一部の平家武士たちは殺されたようであるが，建礼門院の没年から考えると彼女は命拾いしたようだ。この戦いにより，25年にわたる平氏（平清盛一族）政権は幕を閉じた。

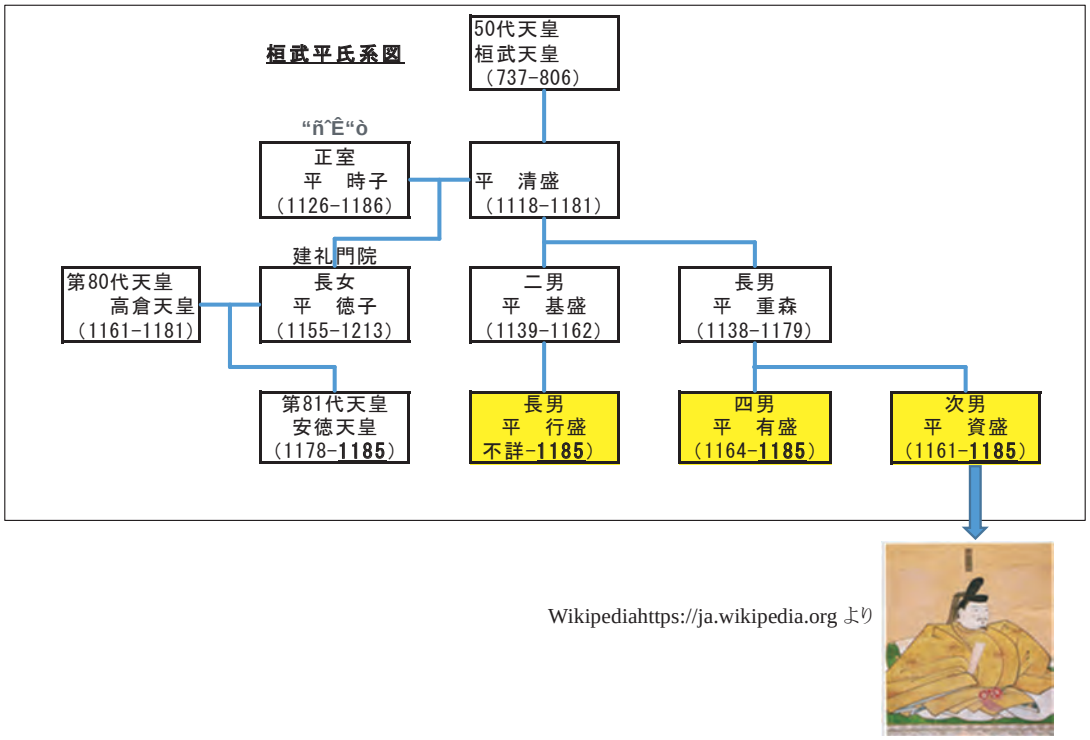

図２　平家系図『保元物語』を参考に筆者作成

２．源為朝の足跡を残す実久三次郎神社

時代背景からしてまず，源為朝ゆかりの神社，実久三次郎神社から説明していきたい。下記清和源氏系図（図３）にも示したように源氏は第56代天皇清和天皇（860-881）の系図上にある。

源為朝は，平安時代末期の武将，源為義（1096-1156）の八男である。兄に源義朝（1123-1160）がいる。義朝は現在 NHK 大河ドラマの主たる人物の長男頼朝（1147-1199）と，異母兄弟の九男義経（1159-1189

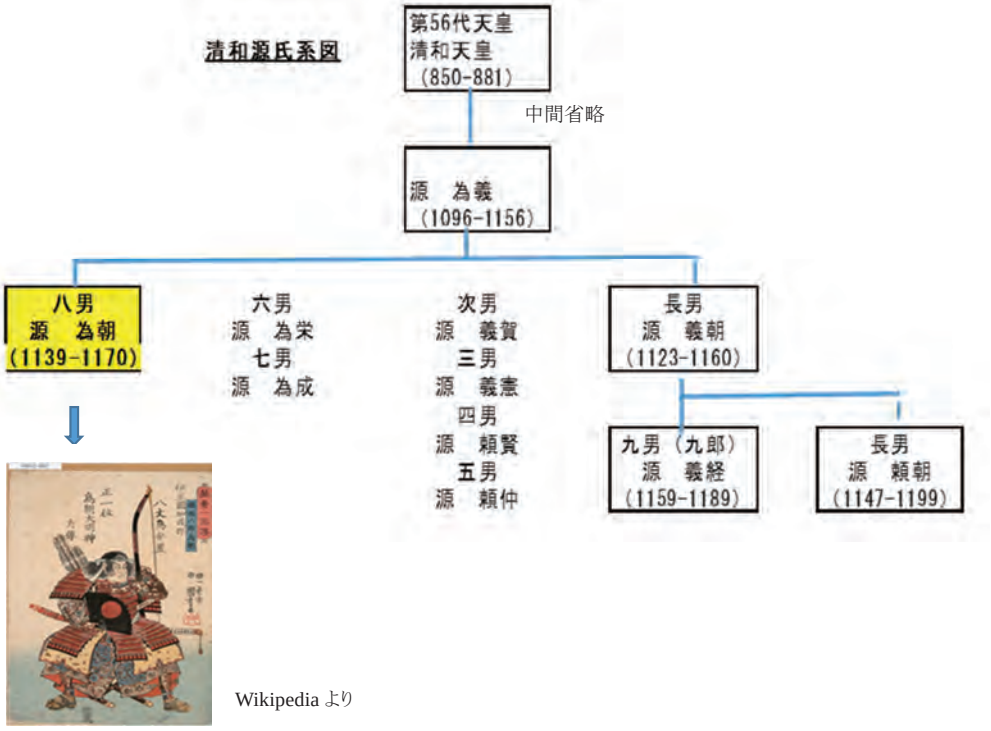

図３　源氏系図『保元物語』を参考に筆者作成

の父親に）がいる。つまり，為朝は両者の叔父にあたる。他方，源為朝は檀の浦の闘い時には既に没しているが，彼のダイナミックな生きざまには驚きを隠せない。下記為朝足跡 MAP（図４）にも示されているように為朝は，伊豆から南は沖縄までその足跡があり，奄美大島にもその痕跡が残されている。

『保元物語』[3] には為朝の武勇伝が記述されているが，為朝は，身長2m を超える巨体のうえ気性が荒く，また剛弓の使い手で，剛勇無双を謳われた。生まれつき乱暴者で父の為義に持てあまされ，九州に追放された。『源の為朝伝説』[4] には為朝の足跡 MAP（図４）が示されているが，追放された九州の地から更に南下して沖縄迄行き，その途中である奄美群島に立ち寄ったことになる。沖縄はこの頃，琉球王朝時代である。

図４　為朝足跡 MAP

為朝が追放されたのは，13歳であり，16歳にして九州（鎮西）一帯を制覇して鎮西八郎を名乗って都に戻ってきた。保元の乱では父とともに崇徳上皇（1119-1164　日本の第75代天皇）方に参加し，強弓と特製の太矢で大奮戦するが敗れ，伊豆大島へ流される。しかし，そこでも国司に従わず，大暴れして伊豆諸島を事実上支配したことから，追討を受け自害した。

『保元物語』の最後には，為朝を超すような源氏はいなかったと締めくくられ，「保元の乱にこそ，親の首を「切りける子もありけれ，叔父の首切る甥もあれ，兄を流す弟もあれ，思ひに身を投ぐる女性もあれ，これこそ日本の不思議たりし事どもなる。」[5] と記述されている。源氏・平氏ともども異母兄弟は多く，母方の争いも含め，天皇家の争いにも巻き込まれていたと考えられる。さて，追放されたとされる為朝由来の神社が奄美大島加計呂麻島に残されている。それは実久三次郎（サネクサンジロウ）神社（図５）である。境内にある説明書きによれば，為朝が奄美大島加計呂麻島に渡った時，そこの娘との間に一児をもうけたとされる。子の名前は源実久三次郎と言い，その子の名前から“実久三次郎神社”と命名された。三次郎の子孫が今日につながっているかは未調査である。

図５　実久三次郎神社　筆者撮影

３．今井大権現神社と平行盛

さて，先述した奄美空港から名瀬に移動する際に気になっていた今井権現に行ってみた。そこは奄美大島の龍郷町安木屋場にあり，鳥居までは車で行けるが，その先は不揃いの石段で更に山を登る。滑り落ちそうなかなり，距離のある石段を上るとそこにあったのは今井大権現神社（図６）であった。ここは檀の浦の戦いで敗れ，奄美まで逃れた平行盛が，今井権大夫に命じて設置した源氏警戒のため見張り台であったようだ。先に示した平氏系図（図２）の様に，行盛は，平安時代末期の平家一門の武将，清盛の次男の平基盛の長男であり，清盛の孫にあたる。

壇の浦の戦いで入水したと言われる行盛は最初，喜界島に漂着，後に大島本島に上陸したとされる。喜界島は奄美大島（図１）の北，太平洋側に位置する島である。壇の浦は現在の山口県下関市にあり，

図６　今井大権現神社　筆者撮影

図７　蒲生崎神社　https://amamitabi.com

奄美からは相当な距離である。入水後，泳いで島々を転々としたのか，または，置き去りにされた船を見つけて乗船して船で流れ着いたのか。それにしても間には波の高さで有名な七島灘がある。小さな船では転覆しかねない命がけの逃亡である。伝承では，奄美大島に落ち延びた平家三将のひとり行盛は龍郷の戸口に城を築き，源氏の追っ手を恐れ，奄美市笠利町蒲生崎（奄美大島）に蒲生佐衛門が源氏警戒のため配された。そして，今井崎は今井権太夫に見張りをさせ，決められた日ごとに戸口への連絡を送らせていた。しかし，権太夫は女性にうつつを抜かし報告が遅れてしまったため，戸口では来るべき連絡が来ないことから源氏が攻めてきたと思い全員が自害。後にそれを知った権太夫も自害したと言われ，その今井権太夫を祀ったのが今井大権現神社である。そして，蒲生崎には蒲生佐衛門を祀った蒲生崎神社（図７　奄美市笠利町大字屋仁《やに》）があるとのこと。この神社にはまだ参拝していないことから画像は奄美大島の広報 WEB 画像をコピーさせていただいた。

４．諸鈍大屯（おおちょん）神社と平資盛

瀬戸内町加計呂麻島の諸鈍集落にある大屯（おおちょん）神社は，壇ノ浦の戦いで敗れた平家の落人の一人，平資盛を祀った神社である。資盛は，平安時代末期の平家一門の武将であり，平清盛の長男，重盛の次男である。入水した行盛同様，奄美大島にたどり着いたようだ。伝説によれば，資盛は，壇ノ浦の戦いから落ち延びて約３年間喜界島に潜伏し，弟の有盛，いとこの平行盛と合流して，ともに奄美大島に来訪したとされる。つまり，入水して死亡したとされる資盛，有盛，行盛の３人は，没年が共に1185年であるが，彼らは喜界島などを経て，奄美大島で合流し，それぞれの場所で源氏の襲撃を恐れながら，島民の中に混じってその生涯を終えたことになる。諸鈍という地名は，壇の浦で敗れた平家の武将が，“諸君，源氏もここまでは追ってくるまい。ここでどんより暮らそうぞ”と言ったことから名づけ

られたという。ここでいう平家の武将とは入水したと言われる資盛の事であろうか。せっかく訪問した諸鈍であったが，寅さんシリーズのロケ地であり，有名な女優浅丘ルリ子がマドンナ役であったのでその記念碑（図８）撮影と，その地のディゴ並木（図９）のみで神社の画像が残っていないのが残念。

ちなみに，加計呂麻島に伝わる諸鈍シバヤは，資盛一行が，土地の人々と交流を深めるために伝えたのが始まりとされる。その踊りは日本の歌舞伎初期の踊りが諸鈍風に定着したものとして注目されており，国の重要無形民俗文化財に指定されている。又，喜界町志戸桶（喜界島），奄美群島に到着した平家が，喜界島の喜界町早町に最初に築いたといわれる七城跡が，源氏警戒のため築いた城跡があり，平家森と呼ばれているそうだ。

図８　ロケ撮影地リリコの家筆者撮影

図９　諸鈍ディゴ並木　筆者撮影

５．平有盛神社と厳島神社

奄美市名瀬浦上に有盛を祀った平有盛神社（図10）があるという。壇の浦の闘いでは，異母兄の資盛に従って参戦。源義経に敗れた後は，資盛，従兄の行盛と三名で手を取り合って，海中に身を投じた。それぞれがバラバラに奄美大島にたどり着いたようであるが，実際，兄の資盛は奄美大島最南端の加計呂麻島諸鈍，従妹の行盛は奄美の北側の笠利と龍郷周辺というように異なる地域に見張り台を立てながら，隠れ住んでいたようである。浦上という地は奄美大島の地図上奄美市内にあり，市内から龍郷に向けて移動すると浦上，大熊，そして一山超えた直線上に有良がある。浦上に続いて後方に有屋という地名もあり，有盛との関係において興味深い。もう一山越えるとそこは，龍郷であり，行盛の範囲になる。

そして，次にもう一つ興味深いのは有良にある厳島神社（図11）である。筆者は，“厳島神社”という名前から広島県にある有名な“厳島神社”との関わり，あるいは平家との関わりから単純に平安文化由来のものと考えていたものだ。ちなみに厳島神社で WEB 検索をしてみると北海道から九州まで多数存在する。九州地区では３か所，その内奄美市名瀬有良町の厳島神社は登録されていない。しかし，その土地の所有者は大蔵省とあるから，実際，そこに神社があることは認識されているのであろう。筆者幼少時代の“厳島神社”は現在の鳥居の後方に小さく見える程度の壊れそうで古かった。現在は改築されたようであるが，当時も今も神主も常駐しておらず参拝も賽銭箱もない本当に小さな神社である。神式で執り行う葬式の時は何処からか神主がやってきて儀式を執り行い，日頃は祖父が管理していた。厳島神社は左側隣は金久平（カネクビラ）という実家所有の山林・農地があったこととも関係しているのであろう。その手前の参道は両サイドに壊れた石器や完全な瀬戸物が埋まっていたので，筆者らが幼き頃のよき遊び場であった。その右側は海岸線であり，東シナ海に面している。

地元の方によれば有盛神社は９月９日も含め，盛大な神社祭りを行うそうである。厳島神社も９月９日に神社祭りを行うとか。有良の地名の“有”も含め関連はありそうだが，厳島神社の入り口にある説明書きには，厳島神社の設立は1718年になっている。厳島神社も写真上で見る有盛神社とほぼ同じ程度の大きさであると思が，画像ではわかりにくい。また画像にある“有良・厳島神社の石祠及び石造神像”

図10　平有盛神社　http://www.komainu.org

図11　厳島神社奄美市名瀬有良

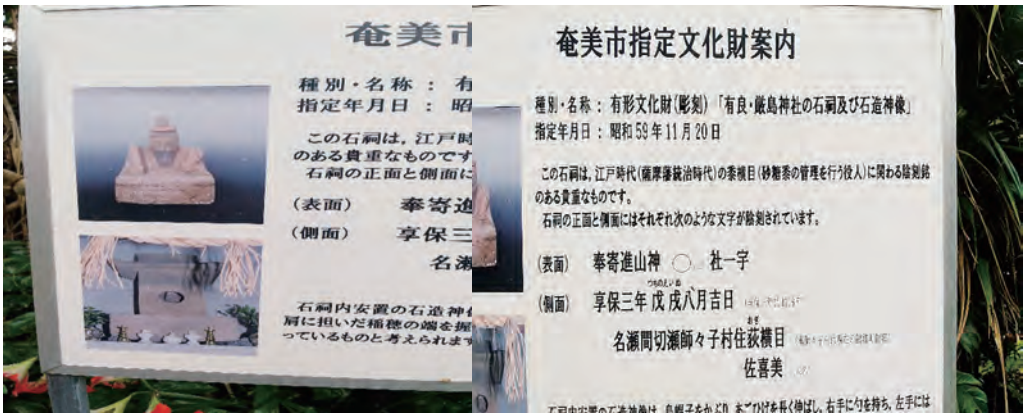

図12　厳島神社の石祠及び石造神像

（図12）は奄美市の文化財に指定されている。作品は龍郷町龍郷の佐喜美という人物であろうか。鹿児島島津藩は，奄美の豊かなサトウキビに着目して，藩の財政の為にサトウキビの栽培を推奨した。その監督官に指名されたのは，田畑佐運（別名佐分仁為辰　1678-1764）という人物である。彼はサトウキビの製造法に水車式を採用した他，開墾や灌漑に尽力した。長男である佐運に協力したのが，次男の田畑為春（佐富1681-1756）と三男の田畑為遠（佐喜美　1684-1750）である。特に佐喜美が開墾に尽力した地は有良・芦花部地域であった。このことから厳島神社設立者と記載されている佐喜美は恐らく田畑為遠（佐喜美）であろう。このあと，田畑家は17代の田畑為勝（佐文仁　1778-1858）の頃に藩命により，龍性に改名した。厳島神社という名前と平有盛神社との関連性も少なからずあるはずであるが，現在のところ未調査である。

おわりに

本報告は，奄美大島に数多く残る平家の落人伝説にまつわる神社や，源為朝由来の神社についての調査結果をまとめたものである。今回の調査では壇の浦で死亡したと伝えられる平資盛，平有盛，平行盛が奄美大島に漂着し，その後，源氏の追っ手を気にしながら，隠れ住んだと言われる場所に設置されている神社と，源為朝のそのダイナミックな人生の途上に立ち寄った奄美大島加計呂麻島の神社についての調査結果である。本調査を通じて，悠久の昔，天皇家の系図上にあった源・平の皇位継承に伴う身内内の闘いの犠牲になった者達の生きざまがそこにはあったように考えられた。６歳の安徳天皇と資盛24歳），平有盛18歳，行盛（年齢不詳）ともに1185年に死亡したことになっている。が実はその続きがあったことになる。隠れ住んでいた彼らにとっては死亡説の方が，都合が良くより安全であったろう。その後の人生の一端が奄美大島に残された神社に祀られた平家落人伝説である。隠れ住んだ平家の若君たち

がその後，島民との間に子をなしたのか知る由もないが少なくとも，安全で平和な生涯を送ったと考えよう。

ふと，訪れた自身の故郷，奄美大島の神社で発見した古き人物の名前から，奄美大島が平家の落人たちの隠れ家になっていたことの驚きは，真にそこに生まれながら何も知らなかったことの驚きと併せて大きい。平安文化は短かったが，その最後の平家の滅亡に哀れを感じる。子供のころから平家の文化のなごりか，奄美に伝わる三味線の音色もそうであるが，特に聞きなれない琵琶の音色に切なさや懐かしさを感じ，心が震える気持ちがした。

奄美大島について調べてみるとまだ，訪れていない平家ゆかりの神社があることが分り，今後，引き続き探索活動を続けていきたい。同時に，先述したように為朝の足跡には琉球王国との関りもあるとされていることから次の奄美史調査への手がかりにしたい。筆者がまだ訪れていない神社が多くありそうであるが，次回は是非，参拝の機会を得たいと考えている。

参考・引用文献

１）文栄吉著：奄美大島物語，南方新社，2008年.
２）昇曙夢著：大奄美史，南方新社，1949年.
３）日下力著：保元物語，角川スフィア文庫，2015年.
４）藤井勝彦著：源為朝伝説，天夢人，2022年.
５）日下力著：前掲書２），p236.